

資料

がん体験者が身近な人に自分の病名を伝える上での悩み

瀧澤理穂^{1§}, 牧野智恵¹

要 旨

本研究は、2018年度地域ケア総合センター事業の「がん体験者同士で語ろう」に参加したがん体験者を対象に、身近な人に自分の病名を伝える上での悩みについて質的に分析したものである。参加者は40～60代の女性4名であった。分析の結果、【家族に心配をかけたくない気持ち】、【伝えることへの過剰な反応への躊躇】、【相手に応じた伝え方に関する悩み】、【身近な人に病名を伝えるタイミングに関する悩み】、【入院中の状況を想定し、隠し切れない相手に伝えることを決断】、【病名を知る他者からの配慮不足に対する不満】の6つのカテゴリーが抽出された。がん体験者は自分の役割や周囲との関係性の中で、病名を誰に、いつ、どのように伝えるか悩んでいることが明らかとなった。

キーワード がん体験者、悩み、病名

1. はじめに

1.1 研究の背景

がんは、昭和56(1981)年より死因の第1位であり、生涯のうちに約2人に1人ががんに罹患すると推計されている。しかし、がん医療の進歩により、全がんの5年相対生存率は62.1%、10年生存率は58.5%と上昇傾向にあり、がんの生存率は向上している¹⁾。入院期間の短縮化に伴い、多くのがん体験者が、定期的な通院、仕事や家事をしながら、地域で社会生活を送っている。がん体験者が病気に伴う困難にうまく対処していくためには、自分の思いを表出し、他者からのサポートを得ることが重要である²⁾。その前段階として、がん体験者であることを周囲に伝えるという行為が必要となる。他者からの理解や協力を求めながら、人間関係の調整を試みることは、がん患者の適応過程にも影響を与え³⁾、他者との交流や社会的役割の遂行が行えている者ほどQOLが高いことが報告されている⁴⁾。

しかし、田中⁵⁾はがん患者は病気が身内に与える心理的苦痛を懸念して病気の開示を悩んだり、他者との気遣いを負担に感じたり、周囲の目をわずらわしいと感じ、他者との関係に悩んでいると報告している。また牧野⁶⁾は、がん体験者同士の対話の機会を設けたことにより、自分のがんを他者が理解してくれないといった悩みを共有していたと報告している。

これらのことから、がん体験者は疾病や治療に伴う心身の苦痛だけでなく、病いとともに生きていく上での苦悩が生じていると考えられ、体験者同士がその悩みを語る場を提供し、そこで語られる内容を明らかにすることは今後のがん体験者を支援する上での資料となると思われる。

1.2 研究目的

本研究は、がん体験者同士の語りの中から、身近な人に自分の病名を伝えることについて、どのような悩みがあったのかを明らかにすることを目的とした。

1.3 用語の定義

身近な人とは、子どもを含めた家族、職場の人、親戚、知人、友人、隣人、医療従事者などがん体験者が療養生活を送る上で関わる人々とする。

2. 研究方法

2.1 研究デザイン

本研究のデザインは質的記述的研究である。

2.2 研究対象者

本研究の対象者は、2018年度地域ケア総合センター事業の「がん体験者同士で語ろう～オルゴール療法で体も心もリフレッシュ～」に参加し、研究の同意が得られたがん体験者とした。本企画は、がん体験者同士がオルゴール療法やアロマオイル抽出体験などを実施したのち、参加者同士で

¹ 石川県立看護大学

[§] 責任著者

「身近な人に自分の病名を伝える上での悩み」などについて自由に対話を行う企画である。なお、対象者のがんの種類、病期、治療内容は問わなかった。

2.3 データ収集及び分析方法

研究対象者の同意を得た上で対話内容をICレコーダーに録音し、その内容を研究データとした。対象者の周囲の人に自分の病名を伝える上での悩みに焦点を当て、意味を損なわないように語りを抽出し、コード化した。さらに類似したコードをサブカテゴリー、カテゴリーの順に抽象度を上げた。なお、データ収集とデータ分析の全過程において、質的研究に精通した共同研究者のスーパーバイズを受け、繰り返し分析を行うことで、信頼性の確保に努めた。

2.4 倫理的配慮

本研究は石川県立看護大学の倫理審査の承認を得た上で実施した（承認番号 402 号）。研究対象者に、研究協力の拒否・中止・途中辞退は自由であり、いずれの場合も不利益を被ることはないことを、文書及び口頭で説明し、書面で同意を得た。面談開始前には、参加者が面談可能な体調か否かを確認した。面談時間は60分以内とし、参加者の対話内容が他者に聞かれないようにプライバシーが保護された部屋で実施した。また対話の際は研究者2名がファシリテーターとして同席し、1人の参加者だけが話をしないこと、自分の考えを他の参加者に強要しないことなどに配慮した。参加者同士の対話内容についても他言しないことについて説明し、同意を得た。

個人情報流出を防ぐため、研究に関するデータは匿名化し、施錠可能な研究者の棚で保管した。研究結果の開示や、発表についても参加者に口頭及び文書で説明し、同意を得た。

3. 結果

研究参加者は40～60代の女性計4名であった。乳がん体験者が3名、胃がん体験者が1名であり、がんのStageはⅠ～Ⅲであった。対話の内容を分析した結果、15のサブカテゴリーと6のカテゴリーが抽出された(表1)。なお、カテゴリーは【】、サブカテゴリーは《》、参加者の語りは「」で示し、意味が通じ難い部分に関しては、研究者が意味を損なわないように()で言葉を補った。以下、カテゴリーごとの内容を説明する。

(1) 【家族に心配をかけたくない気持ち】

病名を伝えることで家族に心配をかけたくない気持ちなどが語られた。このカテゴリーは《子どもの個性への配慮》、《自分より夫が心配してしまうことへの戸惑い》、《高齢の親に心配をかけたくない気持ち》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。《子どもの個性への配慮》では、「子どもたちにはちょっと言えなかったし、あんまり早くに言って、不安がらせるのも可哀想やして思いながら。」と子どもへの配慮が語られた。《自分より夫が心配してしまうことへの戸惑い》では、「(夫の)兄の嫁さんはがんになって1年程で亡くなったからがん＝死みたいな。」と夫ががんから死を連想し、心配してしまうことに困惑する思いが語られた。《高齢の親に心配をかけたくない気持ち》では、「ショックかなって。(父親は)90歳くらいなんですけど言ってなくて。」と病名を伝えることで、高齢の親にショックや心配を与えたくない気持ちが語られた。

(2) 【伝えることへの過剰な反応への躊躇】

病名を伝えることで、血縁者に対しては遺伝的要因から相手が自分もがんに罹患するのではないかと連想させてしまうことへの不安や、近所の人などに対しては同情や噂などをされるのではないかと不安が語られた。このカテゴリーは《血縁者ががんの遺伝可能性を連想させることへの不安》と《病名が本意に広まることへの不安》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。《血縁者ががんの遺伝可能性を連想させることへの不安》では、「乳がんっていうと、自分(子ども)もなるんじゃないかなって心配させちゃうから。」と遺伝的要因から子どもが自分もがんに罹患するのではないかと心配させてしまうことへの不安が語られた。《病名が本意に広まることへの不安》では、「あの人はがんねって噂とか、同情されたくもないし。」と周囲の噂などによって病名が本意に広まることへの不安が語られた。

(3) 【相手に応じた伝え方に関する悩み】

伝える相手の特性を考慮しながら、病状に関する情報をどの程度伝えればよいか悩む気持ちや、相談できる相手がいないことへの思いが語られていた。このカテゴリーは《病状をどの程度伝えればよいかに関する悩み》、《子どもの発達段階への考慮》の2つのサブカテゴリーで構成されていた。《病状をどの程度伝えればよいかに関する悩み》では、「私も悩んだんですけど、どこまで言ったらいいかなって。退院したあとも。(中略)仕事

表1 がん体験者が身近な人に病名を伝える上での悩みについての語りの分析

カテゴリー	サブカテゴリー	語り
家族に心配をかけたくない気持ち	子どもの個性への配慮	子どもたちにはちょっと言えんかったし、あんまり早くに言って、不安がらせるのも可哀想やして思いながら。 下の子はまだ中学生なんで、なんかよくわかってないんか、わかってるけどあんまり感情を出さないんか。
	自分より夫が心配してしまうことへの戸惑い	一番心配してくれとったんは主人やね。「もう、どうしよう」って困ってて。 (夫の) 兄の嫁さんはがんになって1年程で亡くなったからがん=死みたいな。
	高齢の親に心配をかけたくない気持ち	ショックかなって。(父親は) 90歳くらいなんですけど言ってなくて。子どもとしても親に心配かけるのが心配になるし難しいね。
伝えることへの過剰な反応への躊躇	血縁者ががんの遺伝可能性を連想させることへの不安	乳がんっていうと、自分(子ども)もなるんじゃないかなって心配させちゃうから。それが他の病気と違って難しいとこですよ。でも姉には言えてなかったね。やっぱり、家系にがんってなかったから、私のがんって言ったら気にするし。兄弟には言ったけど。 なんか悪いことしちゃったかなって思って。どうしようもない部分ではあったけど。定期的に放射線行って調べてくしかないねって。
	病名が不本意に広まることへの不安	あの人はがんねって噂とか、同情されたくもないし。 息子が知ったら、息子の嫁と嫁の親まで広まるがいね、それがややこしくて。 他の人には言いたくないっていうか、気にかけるかなとか色んなこと思って。 近所の人には誰にも言っていない。今も。なんか変に噂されても困る。
		どこまで言っていていいかわからんし、どうしようかなって考えたね。 私も悩んだんですけど、どこまで言ったらいいかなって。退院したあとも。(中略) 仕事もやけど、親戚とかも。 がんって言われてまずどうしたらいいか、家とか職場にはどうしたらいいかって、誰に相談するん?みたいな。困って。(中略) 他の人にどういう風に言えばいいか、考えてもわからんくて。
相手に応じた伝え方に関する悩み	病状をどの程度伝えればよいかに関する悩み	子どもも小さかったけど胃の病気って言って。難しいこと分かってない年やったし、しばらくおらんくなるってだけで十分やったな。
	子どもの発達段階への考慮	手術するってなってもどうしようか、どのタイミングで言おうかって迷って。 (子どもには) 本当に手術の直前、1週間くらい前に言ったんです。 前に結婚式でみんな集まるとって、おめでたい場でそんなこと言うのもあれやなって思って。タイミングの問題で。 上司に「どこか身体悪いんじゃないの?」って言われて、「え?」って。ちょっと見透かされた感じはしたから「実は」って言って。 入院中に弟のお嫁さんから電話かかってきて。(中略) 退院してから言おうって思ったって説明して。困ったことになって。 気にしとる人もおるかもしれんけど、来年くらいになって、自分も落ち着いてきたら、そんときに話したらいいかなって思って。 事後報告っていうか、がんやったけどもう手術も終わったし大丈夫って、たいしたことないよってタイミングになるんやね。
身近な人に病名を伝えるタイミングに関する悩み	身近な人に病名を伝えるタイミングの迷い	母親には診断ついて、手術するって時点で話したんですけども。黙ってるわけにもいかないし、お願いすることも出てくるやろうし。 主人の母と3人で暮らしてるので、言わざるを得ないですよ。
	意図しないタイミングで身近な人に伝わったことへの戸惑い	職場には迷惑かけるから最初に言わなんって思って覚悟して。 職場はもう上司だけでそのほかは言わなかった。助けてもらわなんんこともあるやろうし、そういう人には言っておかんなんし。
入院中の状況を想定し、隠し切れない相手に伝えることを決断	自分のタイミングで身近な人に伝えたい気持ち	手術日決まったら「これ読んでおいて下さい」って渡されて、えー困るって。(中略) 手術もそうやけど、検査の結果とかも家の人にどう言えばいいん?って。本当、事務的な対応やったんですよ。 緩和ケアのパンフレット渡されて、機械的に説明されただけで、これが緩和ケアなん?みたいな。これから家族にも話して、生活をどう立て直していくか。そういうことへの声かけは一切なし。
	病名を隠しきれないために親に伝えることを決断	帰ってきたらいつも通りだから。別に腕がちぎれてるわけじゃないし、元気そうにしてたからなんでしょうけど。なんじゃそりゃって。 「ちょっと洗い物しといて」っていうと、最初は「えー、なんで?」って言われて、こっちがえーって何?みたいにムッてきて。 「お前がいなくて、じゃあ俺はどうするん? ごはんどうしたらいい?」とか勝手ですよ。入院しとったって知っててそれ?って。
病状を知る他者からの配慮不足に対する不満	医療者からの配慮に欠ける対応への不満	
	子どもからの配慮のない態度への不満	
	夫の自己中心的発言への不満	

もやけど、親戚とかも。」と病状をどの程度周囲に伝えればよいか悩む気持ちが語られた。《子どもの発達段階への考慮》では、「子どもも小さかったけど胃の病気って言って、難しいこと分かかってない年やったし、しばらくおらんくなるってだけで十分やったな。」と子どもの年齢や理解度に応じた伝え方についての考慮が語られた。

(4) 【身近な人に病名を伝えるタイミングに関する悩み】

身近な人に対して、実際にどのタイミングで病名を伝えればよいか悩む気持ちや、意図しないタイミングで身近な人に病名が伝わってしまったことへの戸惑いが語られた。このカテゴリーは《身近な人に病状を伝えるタイミングの迷い》、《意図しないタイミングで身近な人に伝わったことへの戸惑い》、《自分のタイミングで身近な人に伝えたい気持ち》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。《身近な人に病状を伝えるタイミングの迷い》では、「手術するってなってもどうしようか、どのタイミングで言おうかって迷って。」と身近な人にどのタイミングで伝えるかに迷う思いが語られた。《意図しないタイミングで身近な人に伝わったことへの戸惑い》では、「上司に「どこか身体悪いんじゃないの?」って言われて、「え?」って、ちょっと見透かされた感じはしたから「実は」って言って。」と、上司に体調を気遣われ、意図しないタイミングで病状を伝えた体験が語られた。《自分のタイミングで身近な人に伝えたい気持ち》では、「気にしとる人もおるかもしれんけど、来年くらいになって、自分も落ち着いてきたら、そんときに話したらいいかなって思って。」と自身にとって最善のタイミングで身近な人に病状を伝えたい気持ちが語られた。

(5) 【入院中の状況を想定し、隠し切れない相手に伝えることを決断】

自分が入院となったときの状況を想定し、同居家族や仕事関係者など自分の病状を伝えざるを得ない相手を判断し、伝える覚悟を決めようとする思いが語られた。このカテゴリーは《病名を隠し切れないために親に伝えることを決断》、《仕事の関係上、職場に伝えざるを得ない気持ち》、の2つのサブカテゴリーで構成されていた。《病名を隠し切れないために親に伝えることを決断》では、「主人の母と3人で暮らしてるので、言わざるを得ないですね。」と、病状を隠しきれず同居の親に伝える覚悟した体験が語られた。《仕事の関係上、職場に伝えざるを得ない気持ち》では、「職

場には迷惑かけるから最初に言わなんって思って覚悟して。」と治療により仕事に影響が生じるため、職場に伝えざるを得なかった思いが語られた。

(6) 【病状を知る他者からの配慮不足に対する不満】

病状を知っている上で、医療者や家族からの配慮が不足していることへの不満が語られた。このカテゴリーは《医療者からの配慮に欠ける対応への不満》、《子どもからの配慮のない態度への不満》、《夫の自己中心的発言への不満》の3つのサブカテゴリーで構成されていた。《医療者からの配慮に欠ける対応への不満》では、「手術日決まったら「これ読んでおいて下さい」って渡されて、えー困るって。(中略)手術もそうやけど、検査の結果とかも家の人にどう言えばいいん?って、本当、事務的な対応やったんですよ。」と手術までの手続きなど事務的な内容が優先され、家族にどう伝えるかについて医療者の介入がなかったことへの不満が語られた。《子どもからの配慮のない態度への不満》では、「帰ってきたらいつも通りだったら、別に腕がちぎれてるわけじゃないし、元気そうにしてたからなんでしょうけど、なんじゃそりゃって。」と、退院後に自分の体調を子どもが配慮する態度がみられなかったことへの不満が語られた。《夫の自己中心的発言への不満》では、「お前がいない間、じゃあ俺はどうするん? ごはんどうしたらいい?とか勝手ですよ。入院しとったって知っててそれ?って。」と、入院中に自分の体調よりも、夫自身の身の回りのことについての関心を寄せていたことへの不満が語られた。

4. 考察

今回の参加者は本企画に参加できるような安定した身体状態を有しており、病名を伝える相手の心理的負担に配慮しながらも、入院によって身近な人に伝えざるを得ない状況であることを判断し、伝える方法を模索していた。そして、相手にどの程度病状に関する情報を伝えたら良いかなどについては、誰にも相談出来ずに悩んでいることが明らかとなった。

病名を伝える相手への配慮としては、子育て世代である40代のがん体験者は中学生の子どもに対し、50～60代の参加者は配偶者や高齢の実親に対して、不安を与えたくないという気持ちを抱いていた。近年、子育て世代のがん患者の子ども

に対する病名の伝え方や支援について関心が高まっているが⁷⁾、超高齢化社会を迎えるにあたり、高齢の親に心配させたくないという理由から親に真実を伝えられないがん体験者の思いにも配慮が必要である。

さらに血縁者に対しては、がんを伝えることによって、相手が「自分もがんに罹患するのではないか」という不安を抱くことを危惧していた。家族に乳がんの罹患者がいた場合、その血縁者が遺伝的に近いほど発症リスクは増加し⁸⁾、さらに女性は男性より乳がんの罹患率が高い⁹⁾。そのため、性別による発症リスクに配慮し、兄弟には伝えしたが、姉妹には伝えられなかったと語った参加者もあり、子どもや同胞に伝える際には、性別による配慮も生じていた。自身ががんに罹患したからといって、近親者が必ずしもがんに罹患する訳ではないが、遺伝の影響が大きいがん種もあり、がん体験者が血縁者に病名を伝える上での不安の一つとなっている。看護師は、患者の既往歴や家族歴などから遺伝の可能性を判断し、患者や血縁者の希望を確認しながら、必要に応じて定期的な検診や専門機関への橋渡しなど、本人と血縁者への継続的なフォローを行っていく必要がある。

また、参加者は悩んだあげく身近な人に病名を伝えても、思うような配慮が得られないことでの不満も語っていた。乳がん患者のソーシャル・サポート・ネットワークの構成員としては、配偶者、患者同士、医療者（医師と看護師）、子どもの順に多く、以下、兄弟、友人、親、知人、親戚、同僚と続いている¹⁰⁾。そのため、参加者の一番身近で病気の経緯を見守ってきた家族に対しては、病状を踏まえた上でサポートしてほしい希望が大きいのではないかと考える。なお、医療者に対しては、診断後には今後の治療の説明や入院の手続きなど業務的な内容に重きが置かれ、精神的なショックや周囲に病名を伝えることを含めた生活の調整に関して十分に相談できない現状にあった。牧野⁶⁾の研究においても、がん体験者同士が話し合う中で、夫や他者の過度な同情や誤解に起因するがん体験者たちの戸惑いや不満を話す場面があったが、つらい体験を語るうちに、今生きていることへの感謝や、同病者を支えたい気持ちを表出する場面もあり、参加者同士が前向きに生きる姿勢を確かめ合う様子もみられた。このようになんかがん体験者の悩みの共有だけでなく、身近な人への不満も含めて自由に表出できる場を設けることは、がん体験者が前向きに生きる原動力にもな

り得ると考えられる。

以上からがん体験者は、がん告知後、誰にどのように病名を伝えたらよいかに悩み、伝えたあとも期待するサポートが得られない場合も生じ、身近な人との関係性の中で複雑な心境にあることがわかった。

本研究の参加者は全員女性であったが、女性は仕事をしながら家事や育児に奮闘し、近所、子ども関係、親戚などの付き合いを通して社会生活を送っている。場合によっては親の介護を担うこともある。女性のがん体験者ががんの多くの役割を遂行するためには、生活面における周囲からのサポートが重要になる¹¹⁾。アーサー¹²⁾は、『医療の目的は、疾患過程のコントロールと病の経験に対するケアとの両方である』と述べている。例え同じがんという疾患に罹患し、似たような家族構成、職場環境に置かれていても、個人の解釈の視点によってがんがもたらす意味や経験は異なる。看護者はがん体験者それぞれの病いの意味に耳を傾けることで、病いによって生じる人間関係の問題など、がんサバイバーとして生きる上での諸問題に対するケアの提供が可能となる。患者を取り巻く身近な人の中でも看護師は、患者が病名を伝える上での困難が生じずに病状を共有できる存在である。患者らしい生活を支援する上で、看護者は症状管理だけでなく、身近な人との関係性に悩む患者の思いに関心を持ち、相談相手としての役割を十分認識し、関わる必要がある。

5. 結論

今回、がん体験者同士が病名を伝える上での悩みを語る場を提供した結果、自分の役割や周囲との関係性の中で、病名を誰に、いつ、どこまで伝えるかという悩みを抱えていることが明らかとなった。看護師は、がん体験者を取り巻く人々との関係性の悩みに寄り添う関わり必要性が示唆された。

6. 今後の課題

今回の参加者は4名であり、がん種、年齢、家族構成、就業の有無、治療段階などの属性が異なっていた。今後は参加者の人数を増やし、対象者の属性を統一していく必要がある。

謝辞

本研究にご協力いただきました研究参加者の皆様に心よりお礼申し上げます。なお、本研究は

2018年度地域ケア総合センター事業費及び2018年度石川県立看護大学学内研究の助成を受けて、実施した。

利益相反

なし

引用文献

- 1) 国立研究開発法人国立がん研究センター：平成30年がん登録・統計サイト。 http://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/stat/site.html (accessed 2018/7/2)
- 2) 楠葉洋子, 橋爪可織, 中根佳純：外来看護療法を受けているがん患者の気がかりとそのサポート。保健学研究, 24(1), 19-25, 2012.
- 3) 水野道代：がん体験者の適応を特徴づける認識の構造。日本がん看護学会, 12(1), 28-40, 1998.
- 4) 光井綾子, 山内栄子, 陶山啓子：外来化学療法を受けている患者のQOLに影響を及ぼす要因。日本がん看護学会誌, 23(2), 13-22, 2009.
- 5) 田中登美, 田中京子：初めて化学療法を受ける就労がん患者の役割遂行上の困難と対処。日本がん看護学会誌, 26(2), 62-75, 2012.
- 6) 牧野智恵, 松本友梨子, 川端京子：子どもをもつがん患者同士の対話の特徴—親子参加型がん患者支援プログラムでの母親同士の語りの分析—。日本がん看護学会誌, 31, 172-180, 2017.
- 7) 小林真理子：親のがんを子どもにどう伝え、どう支えるか。がん看護, 18(1), 47-51, 2013.
- 8) 日本乳癌学会編：乳癌診療ガイドライン2 疫学・診断編2018年。金原出版, 64-67, 2018.
- 9) 日本乳癌学会編：乳癌診療ガイドライン2 治療編2015年。金原出版, 16-17, 2018.
- 10) 宮下美香：乳がん患者により知覚されたソーシャルサポートに関する研究。看護技術, 50(3), 242-248, 2004.
- 11) 梅澤志乃：女性がん患者に対する生活へのサポート—リエゾン精神看護師の立場から—。女性心身医学, 17(3), 281-285, 2013.
- 12) アーサー・クライマン(江口重幸・五木田紳・上野豪志)：病いの語り—慢性の病いをめぐる臨床人類学。誠信書房, 東京, 335, 1996.

Concerns of Cancer Patients Related to Communicating Their Disease to Those Close to Them

Riho TAKIZAWA, Tomoe MAKINO

Abstract

In this study, a qualitative analysis was conducted of concerns related to communicating their disease among participants in the “Conversations among Cancer Patients” event, which was held as part of the 2018 Community Care Comprehensive Center Project. The subjects were four women with ages ranging from 40s to 60s. The analysis extracted six categories: “feeling that they don’t want to worry their family,” “hesitation because they’re afraid people will have excessive reactions,” “concerns about the right way to tell different people,” “concerns about the right time for telling people close to them,” “deciding to tell people they can’t hide it from since they expect to be hospitalized,” and “dissatisfaction related to lack of consideration from others who know about their disease.” This showed that cancer patients were concerned about who to tell about their disease and when and how to tell them; these concerns were related to their roles and relationships with their surroundings.

Keywords cancer patient, concern, disease